

或る戰國武士の自叙傳 (中)

—— 玉木吉保の身自鏡の研究 ——

文學博士 三 浦 周 行

教育史の史料として

本書の大體に亘つて其價值を批判した私は、これより進んで種々の方面から稍詳しく本書の内容を解説もし批判もして見たいと思ふが、順序として先づ著者の生立から教育、學問、藝術等を主として戰國時代の教育史料としての本書の考察から始めることとする。

一 寺院の教育 著者が安藝の片田舎なる溫井村(廣島の北)で呱呱の聲をあげたのは天文二十一年七月八日であつて、皇室は式微を極めさせられた後奈良天皇の季世に當り幕府は下剋上の犠牲になつて非業の最後を遂げた義輝將軍の初期であつ

た。著者に従うと、彼れは生れて百日の後、祖父の幼名を襲うて初次丸と命名され、十三歳の正月十一日、主君毛利元就の前で元服を遂げ又三郎吉保と名乗つたといつて居るが、此點は元龜三年六月十七日、時の主君輝元から加冠を許されたのである家藏の文書がこれを裏切つて居ること前章に説いた通りである。私の研究に據ると、著者の初陣は元服も濟まぬ十八歳の時の事となるが、元服前でも出陣するは昔から武士に有勝の習であつたから敢て怪むに足らぬ。

此時代の教育に於ける寺院の地位は今更言ふ迄もないことで、初等教育は一般にそこで行はれ、

大名の子弟さへ毎日登山通學したものであるが、著者も十三歳の時勝樂寺といふ眞言宗のさゝやかな寺院に遣られ、權大僧都大阿闍梨俊弘法師といふを師匠として教育を受けさせられた。こゝに彼れが登山入學してから下山退學するまで前後三年間に修め得た課業を年齢順に排列して見ると、

十三歳 入學

手習 (いろは、假名文、漢字)

讀書 (心經、觀音經、庭訓往來其他往來物、

貞永式目、童子教、實語教)

十四歳

手習 (翌年の記事から推して漢字を習つた

と思はれる)

讀書

(論語、和漢朗詠集、四書論語を除いたもの
九代集を擧げ
て居るやうに五經、六韜三略等)

十五歳

手習 (漢字の草行二體を卒業して眞書に移

る)

讀書

(古今和歌集、萬葉集、伊勢物語、源氏物語、八代集、九代集等)

和歌 連歌

能樂

十六歳 退學

といふことになる。即ち第一年は手習と讀書との二科であるが、著者はいろはを五日間であげ、清書して父に示したといつて居る。讀書の中に心經觀音經のあるのは看經の爲めで、庭訓往來其他の往來物や貞永式目(本書に式定と書いて居るは式條即ち式目の事である)童子教、實語教は文字を覚え、兼ねて俗用文の文體に馴れさせる爲めであつたらう。

第二年に入つて始めて漢籍が教科書となつて居る。(朗詠は別として)六韜三略は武士の教育丈に意義はあるが、寺院學校の教科書としてはふさは

しからぬ感がないでもない、而かも是等も大體意義の解釋よりは、寧ろ素讀を主としたものであらう。

第三年には和歌國文に關したものが教科書となつて居り、和歌や連歌の一般智識を與ふると共に作歌法までも授けたものと見える。其頃の歌として著者は

初春早梅といふ心を

春なからふる薄雪の匂ひかは梅の花散る庭の眞砂地

夏の歌

鳴かこよれ覺わひし夏の夜の心いられのほこきすかな

秋の歌

秋の夜の名高き空の月しろは木々の梢にうつろひにけり

冬の歌

ふりつくし雪を嵐の吹はらひ松のみざりは春めきにけり

以上數首を擧げて居る。能樂は一種の娛樂とはいへ又高尚なる趣味の一であつて、「若侍の嗜に人々申給へるは忝次第也」と著者も言つて居る。

斯様に學年の進むにつれ教科書の改つて行くところに寺院教育家の用意が窺はれる。國民としての普通學の智識と常識とを與へる爲めに往來物を初めに授けたこと、特に漢籍の力を附けた後に國文和歌を教へて居たことなどは注意すべきである。數學がゝつたものゝ教科目に漏れて居ることは實用的にも著しい缺陷といへるが、僧徒としては餘儀ない事であつたらう。著者は學業のひまゝに餘技として醫術をも學んだ。其事は下に述べる。又看經用として最初から心經、觀音經を授けられたことは寺院教育の一つの特色といへる。

著者は其寺院生活を細かに書きとめて居るが、それに據ると、毎朝早く起きて手水を使ひ髪を結うて先づ本堂に參り本尊を禮拜し、それから梵天帝釋四大天王を始め下界の鎮守先祖の尊靈等に廻向するを日課として居つたのである。そこに當時の武士が少年の頃から知らず識らず其信仰を體得

しつゝあつた徑路も窺はれやう。

著者は又敎授法の嚴格であつたことについても次ぎの如く述懐して居る。八歳の條には

朝食終レハ楊枝ヲ遣、ウカイシテ、髮ヲ結ヒ衣裳刷ヒ、宗祇ノ短歌ノ如ク、身ヲ嗜ミ、机ヲ立、墨ヲ摺、終日迄手習シテ、日モ夕陽ニ傾ケバ、清書シテ、師匠ノ目ニ懸ルニ、一心不亂ニ習ヒタル時ハ、一段神妙ナリト譽メ、疎學不用之時ハ、杖ヲ以テ被打、追籠ラル、時モ有、扱又霄ニモ成ケレハ、螢雪ノ光ヲカ、ケテ書ヲ讀、

次の歲には

朝ニハ朝水ヲ取テ椀ノ傍ニイ、師匠ニ參セ、夕ニハ洗足ヲ催而、廊ノ際ニ畏リ、心ヲ盡シ身ヲ碎、師範ノ奉公不淺、弟子去七尺、師影不可踏ト申候ヘハ、誠尊敬無極者也、晝夜習學スルト云ヘトモ、生德愚鈍ニ而、所學淺シ

是等の記事は寺院在學時代の著者に依つて孝道や師道の嚴守されて居つたこと、刻苦勵精夜を以て日に繼ぎ、而かも謙遜にして從順であつた一班が窺はれる。寺院に收容されて慈悲深い師僧に薰陶される少年が昔スバルタの敎育にも似た手嚴しい鞭撻を受けつゝあつたとは聊か意想外の感もするが、初等敎育の見地からいへば強ち失當といはれまい。斯くてあらゆる艱難缺乏に堪へ得る修練は既に業に入學第一年より養はれつゝあつた。學科目の配當が所謂讀み書きの實用的方面に傾いて居た上に、精神的方面をも闕却しないで、品性の陶冶に相當用意の厚かつたを認めぬ譯には行くまい。

師弟の間にまつはるやさしくも又うるはしい情緒は著者が下山後も恩師の示寂後も緜々として絶えなかつた。勝樂寺の後住となつた俊賀が、出世の望はありながら其力もなく、前住の敎へ子たる

著者を憑て來た時、人々を語らうて花々しく傳法灌頂を行はせ、昔の師恩に報いたことが二十一歳の條に見える。

二、家庭の教育　といつても別段一定の日課の下に餘儀なくされての事ではなく、武士の本務（御役目）の餘暇に一種の遊戯として行つたに過ぎぬのは著者が下山の年の記事に於て「此二三ヶ年在寺シテ窮屈ナリケレバ、暫ク令休息ケル」といつて、弓馬蹴鞠を翫んだことを載せ、又十八歳の時「御役目モ無リケレバ色々ノ遊ニテ暮シケル」といつて書道、假名遣、連歌を習つたことを書いて居るのでも知れやう。而かも下山の年に、春の遊として毎夕集つて小的を射、又馬術を稽古したのは武士だけに所謂弓馬の道を先にしたもので、遊戯とはいへ意義がある。著者は又弓について其名や材料及び羽を説明し、馬について種々の乗り方を擧げ、蹴鞠も其心得についての飛鳥井殿知袋の歌

を收めて居る。連歌については其起源から沿革の大概を説いて紹巴が天正十七年に關白豊臣秀次に上つたといふ歌式目を抄録し、假名遣について定家のそれを簡單にしたやうなものを載せて居る。

二十歳の時には世上が豊かであつた爲め、著者は彼方此方の振舞茶湯など取持つたといつて料理法を載せて居る。

夫料理調味非賤シキ事、天地開初シヨリ五體五輪トテ地水火風空、五色ニ分テ青黄赤白黒也、此五色則春夏秋冬土用也、醋苦甘辛鹹此五味以、天地之間有生非生ニ至迄不賞ト云フコトナシ、増而人形此五味ニハヅル、事ナシ先初春ノ元日ニモ青膾ヲスルコト、春ハ青體木色東圓形トテ青ク醋キコト本也。

といふを序言として、四季とり／＼の料理の獻立から調味法まで詳しく書き立てゝある中には料理物語などに見えたのとも違つて珍料理もあるらし

いが、最後に「右是ハ田舎料理にておかしき事也」と斷つてゐるは餘儀ないことであらう。(料理に關聯して二十六歳の條に合食禁の歌が載つて居る)茶湯については此條には其記事がないけれども、四十九歳の條には、著者が大阪に於て或る茶人に質した茶禮に關する聞書がある。當時都鄙を問はず武士の間に茶趣味の普及して居たことの見らるゝ一資料である。

著者が其下山後二十歳までに家庭にあつて學んだことは寺院教育の補習と見るべき書道、連歌、假名遣の外、武士としての身心鍛練に効ある二三の武技や社交的でもあり又實用的でもあつた茶湯料理等であつた。何事につけ研究心に富んだ著者は其遊戲三昧とした是等の技能に對しても割合に眞面目であつたらしく見えるが、到底寺院時代程の緊張は望れぬ。要するに武士として人間として必要缺くべからざる基礎的智識は彼れが在山三箇

年の間に授けられたものと見ねばならぬ。

著者は本書のはしがきの後に自ら其異名を列舉して居る中に「易名是空、連歌名自咲、醫名僞眞」といふのがある。これ著者が斯三つの道にかけて多少自信のあつたことをほのめかすものである。就中連歌は彼れが登山後其師に就いて手解を受け家庭に於ても熱心に學習したものらしい。醫術も在山中に彼れの授かつた往來物の中、例へば尺素往來などには和藥漢藥及び其特効等の一班を示して居るが、彼れの告白に従うと、其師匠が此時代には有勝な僧にして醫を兼ねた人であつた爲め朝夕のひま／＼に教つたものである。五十歳の條に

醫道ノ事、童ノ時、手習ノ師匠名醫ニテ有ケレバ、朝夕ノ透々ニ醫學シ、脈ナド取試ミタリ、奉公ニ無寸暇ケレバ、人ニ藥ナド放ス事ホトゴ稀也、旅行ノ會釋、又ハ身モ老ケレバ、用藥ノ爲ニ醫ヲ專ニ道トスル也。醫不_レ及_三世不_レ

レ用其藥有レハ、在京（大阪に滞在したこ
と）ノ次ニ、古方當流共ニ家傳ノ秘方ヲ傳ヘ、
療治ヲ專トスル也、醫名ヲハ僞眞トソ云ケル
法名似心ト云、其聲ヲ借リ字證ハ違ヌレ共如
此、僞ハ虛、眞ハ實ト云心也、虛々實々ノ分
別也、尙深旨ハ筆言ノ外ニ有之。

といつて、一廉の醫者になりすまして居る。次に
彼れは其大阪の旅宿の隣に居つた法華の長老と晝

寢の用について奇抜なる問答を重ねたことを書き
又藥の特効を詠みこんだ歌藥性や脈の事を詠んだ
歌脈書を載せて居る。殊に其五十九歳の條に載せ
た彼れの醫文車輪書と題する戯作は父におくれた
閑居の筆すさびであつて慶長六年の自序のあるも
のであるが、筋は心氣佐勞齋（病）の蜂起を藪僞介
白翁（醫）が征伐する戦争を書いたもので、各種の
疾患に對する對症療法を人化したものであるから
當時に於ける醫術の發達を窺ふに屈強の資料であ

る。易についても、著者が在山中一とわたりの豫
備智識は得たらうが、四十歳の條に據ると、彼れ
は大阪に滞在中是三なる儒者に逢うたのを幸ひ、
易の傳授を受けて其研究慾を満たしたのである。
彼れの易名の是空が空則是色、々則是空に取つた
こと、孔子の四十五の時に易を傳へられた例に倣
つて當年傳授を受けたことなど何れも彼れ自身辨
明して居る事實である。

其他四十二歳の條には平安遷都の初から京の廣
さ、さては其縦横の町名より歴史事實の起り六十
六國の國名などを書き記したものがあつた。後者は
當時一般の國史智識の基礎となつて居た年表の抄
録と見るべきものである。

と尙ほ三十歳の條から著者が毛利家の領内の檢地
に關係したことが見え、四十歳の條から米方の奉
行を承つたことが見える。是等は數學の素養なく
ては全うし難き任務であること言ふまでもない。

三十歳の條に、檢地に於て田地の等級を定むることを始め、田積、田租等の事を説明して居るところはこれを證して餘りがある。これ恐れらく著者の自修と經驗とに依つて得た智識であらう。彼田地の段大中小の定が段畝歩となつたことを「太閤様ノ時ヨリ畝フミニ成也」といつて居るのは通説ではあるが、其當時を去ること遠らざる記録だけに注意すべきである。

戦史の史料として

著者は一生の中に幾度か實戰に臨み、死生の巷に出入したから、身自鏡に載せて居る記事には從來の戦史を補ふべきものが多い。著者の初陣は永祿十二年であつた。當時毛利は中國唯一の雄藩として勢力の絶頂點に達し、是歲元就は更に吉川元春、小早川隆景の兩將に大兵を授けて海を渡り大友を攻めさせ、元就自身も進んで赤馬關に陣取り其意氣將に九州を呑まんとした。閏五月にはさし

も堅固の立花城も落ちて大友の旗色がわるい。大友としては如何なる犠牲を拂ふも此大敵を喰ひ止めねばならぬ。著者は是時毛利の宿敵であつた尼子の遺臣山中鹿介が、舊主勝久を奉じて兵を擧げたことや、備前の宇喜多直家が心變りして備中を攻め、備後の藤井が阿讃の兵を催して神邊城に入り、更に豊後からは大内輝弘が海を渡つて周防山口に打入つた爲め毛利の九州侵入軍の引班したことなどを指摘して居る。是等の反毛利側の時を同じうして起つた中には無論大友と牒し合せて毛利の虚を擣いたものもある。特に輝弘の奇襲は毛利方の牽撃運動として恐らく豫期以上に奏効したものであらう。されど彼れの手兵は防長の浪人や九州浪人さては豊後の町人等四五百人と御答書に見えるが如く、元就の一令の下に急いで引揚げた元春の大軍に拮抗すべき筈もなく、十月二十一日の富海の戦に敗れて茶臼山の露と消えた。

著者は是時安藝から十五歳以上六十歳以下のものを驅り催して千虎(秀包)を大將とし富海に攻め寄せた三萬餘騎に加はり、疲馬に鞭つて人並みに出陣し戰場にては佐向右近といふ敵と渡り合つて勝利を得たことを述べて、

予先サキガケテ行ケル處ニ、トノミノ濱夷ノ前ニテ佐向右近ト云者ニ名乗相、追ツ返ツ合戦ス、右近ハ大ノ男ニテ、力モ強シ、身ハ若年ナレバ、手柄ノ非可及、併運ハ在天ニト思ヒ、太刀ヲヒシ／＼ト打合ス、右近ガ刀ハ長メ精在リ、以テ開テチヨウト打處ヲ、砦ト背ケテ、七重ノ薙ノ太刀ノ位ヲ以テ、中ヲ拂ケレバ、右近ガ兩膝直ント切テ倒ス、即首ヲ取テ頸ヲ打落ントシケル處ニ、味方跡ヨリ襲來テ、我ヲ取テ刎除、數多ノ勢ニ頸ヲバ奪タリ、是則若輩ノ故也ト無曲ソ立タリケル。と花々しい初陣の有様が手に取る如くに書かれて

居る。

斯くて敵の侵入軍は一と揉みにもみ消されたものゝ、此機會に測らずも是迄保護色に隠れて居た反毛利側の色彩が鮮明になつて來て、さながら歐洲のバルカンにも似た備播作諸州の形勢は毛利の樂觀を許さないことが知れ、加之毛利に取つて恐るべき新手の大敵さへ現れた。それは外ならぬ織田信長である、信長は其準備時代こそつとめてさりげなき風を装ひ、山中鹿介等にも表面は無情くして居たものの、西方經營の手が延びれば延びる程、時の問題であつた毛利との衝突が次第に露骨になつて來た。彼れがバルカンの小邦にも比すべき諸豪族を巧に繰つて毛利に裏切らせつゝ、歩一歩其地歩を踏みしめて敵の足下に近づいて行つたことは毛利に取つて一大脅威であらねばならぬ。搗てゝ加へて元龜二年に元就が卒した。兩川の輝元支持が其崩壊を免れ得させたいへ、毛利の家

運の漸く下坂になつて來たことは否むことが出來ない。著者無心の記述にも、毛利の影の薄れ行く跡が可なり能く現れて居る。

十七歳の條には元龜二年六月十四日元就の卒去の記事を承けて千人許の宇喜多勢の楯籠つた備前備中の國境なる松島城を隆景の攻撃したことが見える。當時吉田から派遣された後詰の軍勢に加はつた著者は松島城の要害堅固であつたことを説いて

彼松島ト申城ハ、四方ハ大沼ニテ、其真中ニ、高サ十丈餘、廣サ三町許、長サ五町程ノ山也、九ニツ在、北方ノ丸ヲ城ニ誘ヘ、大堀二重ホリ、練築地ヲツキ、所々ニ高櫓ヲ上ケ簀子ヲ結、逆木ヲ引、内ニハ究竟ノ兵共籠レリ、傳聞唐ノ樊會張良、日本ニテハ次信忠信辨慶景清成共打入ヘキ様ハナカリケリ、又南方ノ丸ハ本城ヨリモ一ハイ大也、夫迄大沼ニハ、近

方ノ家ヲ壞テ、竹木ヲ寄セテ、大道ヲ作り、尾頭ノ丸ヲ御陣ニ被召、味方ノ我ト思フ者先懸メ進ミケリ、

といひ、こゝにても又一人の強敵と渡り合うたことを述べて居る。此松島城は植木秀長等の楯籠つた備中國阿賀郡（今阿哲郡）中津井村の佐井田城（齋田とも才田とも書く）の事であらう。陰徳太平記にも此城について當城堅固の地といつて居る。

毛利が元就の卒去後三月もたぬうちに早くも兵を出したのは所謂弔合戦ともいふべきものであるが、其目的は毛利の九州陣から暴露された不利なる新形勢の挽回策として、先づ宇喜多方となつた備中國人の脅懾に取りかゝつたのである。寄手は宇喜多方の後詰にあつて一時苦戦に陥つたけれども、遂に城をば乗り取つたが、明年二月宇喜多との和議が出來て一先づ攻撃の手を收めた。

著者が十九歳の條に「備前ノ宇喜多素表裏ノ者

ナレバ、種々懇望メ亦和平メ、馬ヲツナク」といつて居るのは實は二十一歳の時の事である。尙ほ直家の和を請ふに至つた心事を揣摩して「備中ノ三村ヲ爲亡ナリ」といひ、備中國松山城主三村元親を伐たん爲めとして居る著者の見解にも私は同意することが出来ぬ。私は直家の眞意が其隣國の

宿敵播磨國天神山城主浦上宗景に對する自衛策に外なかつたらうと思ふものである。信長の中國進出の魔の手は其關門ともいふべき播磨に延ばされ、天正元年十一月宗景の請ふがまゝに同國の外、備前美作までの朱印が宗景に出でたと聞いた彼れは、信長を怨むことの深いだけ、早晚同一の運命に廻り合すべき毛利と握手するに至つたのである。此頃主命を奉じて、上方の偵察の爲めに上洛した毛利方の安國寺惠瓊が先見に富んだ十二月十二日附の手紙には、彼れが同じ年の暮に歸途岡山を過つて直家に面謁し、播磨廣瀬へ出兵の打合を

したことが見えて居る。而かも宗景は敵の機先を制して、翌二年四月我から進んで兵を出だし、直家と戰を交へて遂に岡山に迫つた。此宇喜多一家の浮沈問題の前には、一三村の興廢の如きはもとより齒牙に挂くるに足らなかつたこと言ふ迄もあるまい。

さりながら三村對宇喜多、毛利の啞合ひが中國から四國へかけての舞臺に波瀾を捲き起したのは事實である。著者はこれについて「三村之九州御陣の跡ニ阿波へ密通無_レ紛レハ、其科難遁事也」と説明して居る。阿波とは三好の事で、御答書に、「元親ノ一類ハ連連阿州ト申通ル筋目ニヨツテ、此節彌阿州ヲ後ニ當候」と見え、毛利家日記にも「三村ハ三好ヲ頼ミ、藝州邊モ敵ヲ可仕内存ト聞ユ」とあるに相當するが、それには三村の方にも多少の同情すべき點がないでもなかつた。永祿十二年毛利の九州出兵の虛に乗じて直家が備中に討

ち入つたから毛利方の諸士はしきりに急を告げたけれども、もとより援助の餘裕が毛利になかつたので、彼等は心ならずも直家に屈服を餘儀なくされた。三村が三好に通じたのも是時で、彼れも遂に直家に従ふの已むを得ざるに至つたのである。

而かも彼れと直家との關係を知るものは其人一倍の苦痛を忍んだことに思ひ當るであらう。彼れの父家親、其子元祐は永祿九年に宇喜多に殺されたから、彼れは毛利に頼つて其積る怨を報いんとしたのである。然るに武運拙くて返り討に合つた上に、宇喜多も亦毛利と一緒にたのを見ては彼れが極度の悲觀も無理はあるまい。是時信長と衝突して紀伊に遁れた將軍足利義昭は頻に毛利に秋波を送つて居たか、毛利は信長に氣兼ねて引受もせねば、信長も亦毛利に憚つて山中鹿介等の世話をもせぬ。とは表面だけで、浦上に朱印を與へた、外鹿介にも因幡で旗揚げをさせるなど、裏面の活

動はをさ／＼抜目がなかつた。信長の誘惑の手は不運を啣ち顔な三村の上にも加へられ、三村をして宇喜多にも毛利にも反旗を揚げさせたのである。天正二年十一月輝元は直家の情報を得て隆景と共に備中に打入り猿懸城を抜き尋で國吉城を陥れ、翌年正月隆景は成羽に陣取つたが、城主三村親成は元親に與みせずして毛利方となつた。著者は是時陣中の落首二首を擧げて居る。其一首は

一ツニツ三村ノ家ノ修理ハセテ身ノ尾張ニモ
成ニケル哉

といふのである。修理は元親がもとの名の修理進で、尾張は此頃尾張守に改めたのを詠みこんだものである。今一首は

取懸ハ懸テ和平ニ成羽殿手ニモタマラヌ敵ノ
體哉

といふのである。手とは手の城即ち國吉城の事で城が備中國手の庄にあるからである。斯くて信長

の毛利に對する敵意の包みおほせなくなつたのを見てよき潮時と義昭が海を渡つて備後の鞆に上陸し毛利をたよることになつたのが、天正三年の二月であつた。

著者は二十一歳の條に毛利が久しく世話をして居た讃岐の香川を同國の宇多津へ上陸させ、程なく長尾羽床の兩城を攻落して本領を安堵させ天霧といふ城に落ちつかせて歸津したと書いて居る。香川とは元吉城主香川義景である。天正五年に土佐の長曾我部元親に攻められ援を乞うたので、隆景が弟穂田元清を後詰の大將として讃岐に渡らせ長曾我部と戦つて追落してやつたことがある。これ著者が二十六歳の秋の出來事であつた。

天正五年の冬、秀吉は信長より中國征伐の先陣を承つて播磨に打入り、先づ東播磨地方を手に入れたから、備前境に程近き上月城を攻め落し、故國回復に熱中しつゝあつた山中鹿介に守らせて毛利

征伐の足溜りとした。斯くと見て危機に瀕した直家からの箭の催促に毛利は大舉して上月城を圍み輝元も松山城へ出馬した。著者は其手に屬して居る。是時秀吉は上月の後詰として書寫山を出で、

城の東高倉山に陣取つた、荒木村重も信長の命を承けて馳せ加つたものゝ、高が雲伯・因作の諸浪人共を備藝伯作防長豊筑十箇國の大軍を以て十重二十重に取巻いて居る上に、熊見河の流れを隔てて一兵たりとも城内に入ること思ひも寄らぬ。著者は是時味方から羽柴と荒木との陣へ各一首の狂歌を贈つたことを書いて居る。羽柴の方は

憂山ニ立テル羽柴ノ陣ナレバ秋風吹ハ散失ニケリ

荒木の方は

荒木弓播磨ノ方ニ打寄セテ引モ引レスイルモイラレス

言ふまでもなく陣中の消閑事ではあるが、これに

ついで著者の言草が面白い。

羽筑ハ成上リ者ナレハ歌ナトヨム事ハ知サリ
ケリ、返歌モ無テ懽テ敗軍シタリケリ、

秀吉を成上りものとして輕蔑したところに、下剋上の世の中にも尙ほ消え難い因襲の力を認め得ると共に、著者の和歌の稽古亦武士の誇たる修養の一つであつたことに思ひ當るべきであつて、秀吉後年の和歌修養も其成上りを掩ふ用意と見れば見られる。(秀吉は此頃も狂歌は詠んだ事下の高松攻の條に説く)

斯くて信長自身も出馬して飽迄輸贏を爭ふ意氣込であつたが、六月の中頃進退兩難に陥つて秀吉が自身上洛して信長に謁し、親しく軍狀を報告して其指揮を仰ぐに及んで愈上月城放棄に決した。七月の初秀吉等が高倉山を引上げると共に萬事休して間もなく開城となつたのである。著者は城將山中鹿介の最後を記して「鹿介ハ命ヲ助リ、中國へ

下ケルヲ備中ノ松山御本陣ニテ腹ヲソ切セラレケル」といつて居るけれども、實は鹿介を松山の輝元の本陣へ護送する途中阿部川の渡場で、毛利方の護衛兵から不意討を喰ひ、驚いて川の中へ飛び込んで對岸へ泳ぎ附かうとしたのを、川の中で敵と揉み合つた末、首を斬られたのである。

上月の陥落は一時織田軍の銳鋒を挫くことが出来たやうなもの、毛利に取つては無二の興國たると共に織田軍侵入の防火壁でもあつた宇喜多が又しても毛利を棄て、織田方になつたことは折角の光輝ある成功をかたなしにして仕舞つた。初め毛利の援兵を請うた彼れは其勝利の織田軍に歸することを信じて虚病を構へ、毛利軍には申譯の爲め家臣を出して置きながら、播磨飾磨津の信忠の陣へ人を遣つて内通したと傳へられる。斯くと知つた兩川は急いで上月から引き上げる、弱身に附込む各地の反毛利側の諸士が色めくといふ始末で

毛利の敗兆漸く濃厚となり出した。著者は二十三歳の條に「例ノ宇喜多め、亦敵ニ成、備中作州伯耆騒動シケル」といつて居る。其「例ノ宇喜多め」の一語に毛利主従の遺恨骨髓に徹したことが窺はれて笑止である。著者は是時美作に従軍して敵を打取つた功名手柄を書いて居るが、それは毛利對秀吉直家の聯合軍の戦をいつたもので天正八年の事と思はれる。

二十四歳の條は著者が六月（天正九年）に立つて伊勢參宮をした往復の記事で自身戰爭に關係はしなかつたが、途中秀吉の居城姫路に立寄つて彼れの鳥取出陣を目撃した記事は秀吉の人物觀として貴重なる一つの史料たることを失はぬ。

播磨の姫路ニ六月十八日ニ著タリ、羽柴筑前殿居城也、上月ノ合戦ニ負ケルコト無念ニヤ被思ケル、但馬ヨリ因幡ノ鳥取ヘ取懸ラレケル、先手勢八人ノ頭ニテ、一萬餘騎ノ立ケル

秀吉モ見物有ケリ、幸ト思ヒ、一日逗留メ、我等モ見物シケル、其時始テ羽筑ヲ能見タリケリ、其姿輕ヤカニ、馬ニ乘リ、赤ヒゲニ猿眼ニテ、空ウン吹テソ出ラレケル、三日跡ヲ打立レケル。

これ信長記に「六月二十五日羽柴筑前守中國へ出勢打立人數二萬餘騎、備前美作打越、但馬口より因幡國中へ亂入」とあるに相當する。去年の上月の敗軍を無念に思つたかとは著者相應の思附きであるが、秀吉の風采を熱視しての彼れの第一印象を直寫したあたりは讀んで言ひ知れぬ感興をそゝられる。秀吉の猿の幼名（私は寧ろニツクチムだと思ふが）が申年の生れから來て居つて、容貌の類似でないとの説も、其生れ年については彼れが天文六年酉年の生れであるとの秀吉事記の記事に裏切られる。又其容貌については伊達家に傳へるものを始めとして彼れの最も古く確かな數種の

畫像を見ても格別猿らしく見えぬとの辨護説もあれば又見えるといふ人もある。斷つて置くが、それらの畫像は何れも彼れの顯榮を極めた晩年のものであるから、さなきだに有勝な畫工の修飾は實物との間に多少の割引を要するものと見なければならぬ。此點に於ては著者の實見程確かなものはない筈である。「其姿輕ヤカニ馬ニ乘リ」とあるは秀吉の小男であつたことを思ひ浮べさせる。服裝の寛濶なのに似氣なく顔や手足の著しく小さい畫像にも彼れの小男は掩はれぬ。其小さくて色飽迄黒く頬骨秀で下細りの顔が「赤ヒゲニ猿眼」であつて見れば「猿カト見レバ人、人カト見レバ猿」(太閤素生記の松下之綱の語)とまでは行かずとも猿の醜名^{シナナ}を信長から頂戴するだけの資格は充分にあらう。彼れの畫像の髭は長く垂れて居るけれども、それは威儀をと、のへる爲めの附髭に過ぎぬ。見榮えもせぬ赤髭には我れながら愛想を盡かした

ものと見える。其見窄らしい小男が、わざとらしく空嘯いて馬を打たせたところ、成程これが後年天下取りの關白ともなるべき人とは思はれなかつたに相違ない。著者が「其日本ヲ掌内ニメ關白ニ御成有ケルハ、更ニ人間ニテハ有マジトゾ云傳タリ」といつて居るのは尤である、が言ふまでもなくこは後日の感想であつて、前文との間に區別を置いて見ねばならぬ。尙ほ秀吉については二十七歳の條にも

羽筑ハ天下ニ上リ(天正十年毛利と和したる後上洛するをいふ)明知果而其外逆意ノ者共責伏シ天下ヲ治メ、日本ヲ掌ノ内ニシテ大明高麗迄傾ケ給フコト、更ニ人間ニテ有マジトゾ人々申逢タリ、

といつて其超人格を認め、又六十三歳の條にも
木下藤吉郎ト云テ、不思議ノ賢臣出來給ヒ、
後ハ藤吉兵衛ニ成、筑前守ニ受領シ、日本國大

明朝鮮國迄打傾ケ、關白太閤ニ御成有タルハ
奇妙ナル事共也、

といつて居る。彼秀吉が狂歌の返しをせなかつた
ことを笑つて「羽筑ハ成上リ者ナレバ歌ナドヨム
事ハ知ザリケリ」とこきおろした著者の驚異を思
ひ浮べて一段の興味を覺える。

二十五歳の條に著者は鳥取城の事を書いて「天
ヨリ釣タル如ナル山城ナレバ、責落ス事モ不相成」
といつて居るのは信長記の「四方離れて峻しき山
城也」と同意である。こゝでは上月と反對に毛利
の後援も何の益にたゝず、滅多に人に許さぬ信長
さへ「武勇之名譽前代未聞」と譽めちぎつた如く、
秀吉は物の美事に上月の怨を報いた。落城後の事
を本書に「因伯ハ此方ヨリ支タリケレバ、羽筑ハ敗
軍セヌヲ勝ニシ播磨ヘゾ被引タリケル」といつて
居るのは秀吉が鳥取開城後、伯耆の味方の羽衣石^{ウエイシ}
岩倉の兩城が吉川に攻められて居るのを救はんとて

自身羽衣石近く出馬し、援兵を残し兵糧彈藥を入
れて姫路に引き上げたことを指したもので、秀吉
は冬の戰を不利として來春を待つ戰略であつたけ
れども、毛利方には著者の如く觀測したものもあ
らう。尤程なく元春も同様引き班して居ることを
も忘れてはなるまい。

二十六歳の條には、著者が輝元の鳥取城後詰と
して出雲の富田城に出馬したのに従つて是歲まで
同地に滞在し春の頃歸陣したことを載せ、二十七
歳の條には宇喜多直家の子秀家が秀吉の縁者とな
つた爲めに上方勢を引き入れたことから毛利方も
兵を出して備前兒島の蜂濱城を攻め更に備中へ引
返して上方勢に備へたことを載せて居る。秀吉が
秀勝を奉じて兒島の城を攻めたのは天正十年の三
月で、四月には岡山に着し、宇喜多勢諸共、備中
に打つて入り、五月七日に高松城を圍んだ。我戰
史上一つの謎として異彩を放つところの高松城の
攻圍戰はこれより始るのである。